

あわや

今治さくらいの物語 梶船の港

現在の桜井漁港の南部にある旧桜井港には、梶船の発着点となった港跡—「梶船の港」がある。梶船は、桜井発祥の漆器行商船であり、江戸時代に天領であった桜井に周辺の村々から年貢米が集められ、その年貢米を行商船で別子銅山を大阪に運んでいたことに起源する。当時、大阪に米を運んだ際に、大阪商人に勧められ紀州黒江漆器を旧桜井港に持ち帰ったところ、飛ぶように売れたことを契機に、各地で漆器を卸すようになった。これが広まり、漆器商人「梶屋」が関わる梶船が多く入港し、桜井の港は活気を呈した。春には伊万里や唐津の陶器を大阪で卸し、秋には紀州の漆器を九州で卸していたことから、桜井には「春は唐津・秋は漆器」という言葉が残されている。梶船行商での販売は月掛け売りで、売り手と買い手の信頼関係によって成り立っており、この月賦販売方式が現在のクレジット支払いの起源となったと言われている。今なお残る梶船の港の礎は、かつて日本を飛び回った桜井の行商人たちの軌跡を伝える。

桜井地区地域水産業再生委員会×愛媛大学井口梓研究室

